

未完の著『正しい政策』*

－ ホートリーの社会哲学をめぐって

平井俊顕（上智大学）

1. はじめに

ホートリー（Ralph Hawtrey, 1879-1975）は、貨幣的な景気変動論を展開したエコノミストとして知られる。また、いわゆる「大蔵省見解」の理論的根拠の提供者としても — したがってケインズと反対の論陣を張った人物としても — 知られる。さらに、ホートリーは『貨幣論』のケインズにたいし、自らのスタンスから厳しい批判を展開した論者でもある。こうした比較的良好に知られている経済学者としての側面は別の機会に譲り、本報告では、今日忘却のかなたにある彼の社会哲学に焦点を合わせたい。

ホートリーはケンブリッジの知的環境下で育った — とりわけ、アポッスルであったという点が重要である — が、ケンブリッジで研究生生活を送ったわけではない。卒業後、大蔵省に入省し、以降、退官するまでのほとんどを省内唯一のエコノミストとして活動した人物である。彼は社会哲学の著作を 2 点公刊している（1 点は『経済問題』（Hawtrey[1926]. 以下, *EP* と略記）、もう 1 点は『経済的命運』（Hawtrey[1944]. 以下, *ED* と略記））が、本報告では最晩年の未刊の著『正しい政策 - 政治学における価値判断の位置』（Hawtrey Papers, 12/2. 全 18 章, タイプ刷りで 528 枚. 以下, *RP* と略記）に焦点を合わせてる。

『正しい政策』は、ムーア倫理学、とりわけ「善の定義不可能性」を根底にすえつつ、経済学・社会学・政治学の領域を批判的に検討した著作である。副題にいう「価値判断」とは、「真の目的」に照らしての判断を意味している。

『正しい政策』の全体は次のような構成になっている。第 1 章「目的」、第 2 章「善」、第 3 章「哲学的宗教」では倫理的領域、第 4 章「政府」、第 5 章「自由」、第 10 章「階級」では政治学・社会学的領域、そして第 6 章「経済的ファンダメンタルズ」、第 8 章「労働」、第 9 章「分配の問題」では経済学的領域が扱われている。第 7 章「資本主義と集産主義」では比較体制の問題、第 11 章「バランス・オブ・パワー」から第 17 章「大国の結

合」では国際政治学の領域が扱われている(第12章「植民地」,第13章「戦争問題」,第14章「共産主義と国民性」,第15章「パワー・ポリティックスとイデオロギー」,第16章「平和共存の条件」).そして第18章として「結論」がくる.

本報告は,第2節で『正しい政策』の主題に言及し,第3節ではその基礎にある「アスペクトの理論」をみる.第4節でムーア主義倫理学を一瞥した後,ホートリーの社会認識(第5節),経済認識(第6節),世界平和論(第7節),ケンブリッジの哲学的展開(第8節)を論じることにする.

2. 主題

題名「正しい政策」は,道徳律のうち,(諸個人との関係の,ではなく)「共同体との関係での」人の行動を示唆している.ここでいう「人」は,公衆ではなく指導者であり,そのはたすべき義務に重点がおかれている.公共政策に責任のある指導者は一市民とは異なる存在であり,一市民がその生活を導くところの「中間的な目的」—それは手段でしかなく,「状況や帰結に制約を加えることを気にせずに行動の支配が許されるとき」(p.528)「偽りの目的」になる—に甘んじるべきではなく,その行動のすべてを「善」という究極の評価のもとにおくべき,とされる.

純粋な理性が認める唯一の目的(究極的目的)は善である.「正しい」政策は,指導者が目指さねばならない「正しい」目的(「中間的な目的」の対峙語)とは「善い目的」のことである.それゆえ,この意味が正確になるためには,「善」とは何かを示される必要がある.

「善」の問題に行き着くとき,ホートリーはムーアの「善の定義不可能性」に従う.善は定義不可能であるというのは,それがマインドにより直覚的に知られるもの,という見解である.ホートリーはこの善を彼の社会哲学の根底に位置づける.

ホートリーは,「正しい目的」(したがって「正しい政策」)の定義は行わない,と宣言しているが,注意すべきは,人は正しい政策を識別できる,と考えている点である.善は「すべての人間の知性の範囲内」(RP, p.136)にあり,しかもそれは客観的なもの,と考えられている.善を見つけるのに,哲学からの導きは不要である.日常行っている判断に訴えればよい.ホートリーはそう考えている.

彼は『正しい政策』の序で、本書の目的を、政治的・社会的問題について、人間の意識に内在する価値観に訴えることで明確な思考を助けること、と述べる。だが、「正しい政策」の「正しさ」、「善さ」が定義できず(といたつても、「善」という属性は、「審美的快樂」、「知的快樂」、および「人的価値」という感情の状態にまで拡張される、と主張されている)、人はそれを(モラル・コードなどを通じた基盤に基づき)直観を通じて得る、というのであれば、出発点から目的が読者任せにされているという印象が拭えない。

第3節 アスペクトの理論

ホートリーの哲学である「アスペクトの理論」についての説明。『正しい政策』, pp. 32-53 でも論及されているが、本格的な検討は、彼の唯一の哲学書で、これまた未刊の『思考と事物』でなされている。

第4節 ムーア主義倫理学

ムーア主義倫理学のホートリーにおける受容の状況についての説明

5. 社会認識

それではこうした哲学的スタンスからホートリーは社会をどのようにとらえているのだろうか。そのさいのキー・ワードとして「指導者」、「進化論」が重視されていることが、容易に認められる。

5.1 指導者(支配者)

ホートリーは、社会を語る時、それがどのような形態であろうと、そこには権力が存在する、と考える。そして、社会には権力を掌握しそれを行使する指導者とそれに従う従者が存在する。とりわけ、ホートリーは社会が存立していくうえで、指導者(ならびに「指導者階級」)を重視する。「権威」、「権力」というタームはそれに関連して登場してくる。

これは社会の形態にかかわらず、然りである。民主主義社会といえども異なるところはない。大衆が選挙を通じて「権力」の行使を議会に委ねる。議会は権威をもち、さまざま

まな命令を下す。大衆は、それらの命令がその時点での、社会に通底する規範・慣習から逸脱していないかぎり、権力の移譲を容認する。それが民主主義である。

「社会は … その手綱さばきにおいて意識的な指図を必要とする」(RP, p.20) というのは、ホートリーの社会認識の基本である。社会においてグループが指導者を承認し、そして指導者によって意識的な指図がなされ、人々がそれに忠誠と服従を示すという状況が実現することで、グループの行為が合理化されていく道が開けるが、そうした指導者を頂かない社会は混乱に陥る傾向がみられる、という認識である。

こうした認識は、彼がコレクティヴィズムを論じるとき(第6節で扱う)、また世界全体をみるとき(第7節で扱う)の根底に存在する。20世紀の初頭、ヨーロッパでは「エリート理論」(「指導者社会学」)が流行していたが、ホートリーがそれらから影響を受けているのか、うかがい知ることはできないが、その可能性は大いにある。

ホートリーは、人々が慣習的に遵守している道德律、そしてこれなくしては秩序の維持が不可能となる道德律が存在する、ということを強調している。指導者であっても、その道德律を遵守していることが、指導者としての地位を維持するためには必要である、とされる。

5.2 進化論

ホートリーの社会認識にあつて、進化論的発想はかなり明瞭に表明されている。人間のマインドは、当初から思考と知識の完全な道具であつたわけではない。それは、有機体の行動をその環境に適応させる手段としての自然淘汰の圧力のもとで進化してきた。人間のマインドの、そこでの主要な働きは、物的環境についての印象を記憶し、「本能的性向」を通じて適切な行動を起こすことであつた。そして「マインドがひとたび十分な発展を遂げると、それはずっと早い社会的進化 - そこでは、本能的反応は「意識的な計画化」によって補完される - への道を開いた」(RP, p.4)と主張される。人間は動物的本性に合理性が加わつた存在なのである。

現在の人間のマインドは、本能的性向を通じた自然淘汰的進化および社会的進化の過程を通じて醸成されてきた。マインド自体、進化するものであり、そして進化したマインドは体系的な思考ができるため、社会のなかに「意識的な計画化」の導入が可能となり、社会の進化はその速度を増すことになった、とホートリーは考えている。

以上が、人類の有史段階以前での進化の説明とすれば、有史段階での人間のマインド

の進化を説明するために用いられているのが、「合理化」である。これは、宗教的教義が、「理性」によって説明可能なものにされていく過程としてとらえられている。そのことで、宗教から神秘的要素が消え、理性により理解可能となる領域が増えていく。それまで人々が理解できないため崇拝していた事象・現象にたいし、理性がそれを合理的に説明できるようになる傾向のことである。それゆえ、「合理化」とは一種の合理主義哲学の進展であり、啓蒙主義思想の浸透である。

人間社会が進化を遂げ、意識が進化することで、人は「善」の問題に目覚め、そのことで倫理的価値とは何かという問題に関心をもつようになる。

6. 経済認識

本節では、「[善という] 究極目的を経済問題に適用すること」を主題とする第6章 - 第10章を対象とする。そこでは、とりわけ「経済的目的」と「経済的正義」が問題にされている。ホートリーの経済認識の一番の特徴は、「究極的目的」たる「善」の重視が、ここでも顕著に認められる点である。本節ではもう1点、2つの体制（資本主義と集産主義）比較という論点を取り上げることにする。

7. 世界平和

ホートリーが世界を語る時、中枢的概念として用いられているのは「バランス・オブ・パワー」である。文字通り、それは独立した国家間の権力の均衡を意味しており、世界平和達成の一手段である。ホートリーは、どのような形態であれ、社会にはかならず権力が存在すると考えている。

8. ケンブリッジの哲学的展開

ケンブリッジを襲った哲学的展開の激流を説明し、そのなかでホートリーがいかなる対処を行ったのか。これが本節での課題である。

9. むすび

ホートリーはケンブリッジにあって、自らの思考を体系的に展開しようとした唯一の人物であった。周知の貨幣的景気変動論は彼の体系にとって一角を占めたにすぎない。彼の目指した体系は、人間社会を包括的に把握しようとするものである。そのさい、根底をなす考え方として、ムーアの「善」が重視される（この点で、ホートリーはムーア主義者のなかでも異彩を放っている）。「真の目的」はムーア的意味での「善」と関連しており、指導者はその推進を専一に心がけることが肝要である。これに対し、公衆は「中間的な目的」を目指して日常生活を送る存在である。

ホートリーにとって、「正しい政策」を定義することはできないが、それがどのようなものであり、そして目的と手段を識別し、目的として善いもののみを直接的判断の対象にするということは、十分に現実的に可能なことである。「善」に基づく「正しい政策」の遂行にとって重要なのは、「正しさ」を直覚的に認識できる人間の力である。それを人間が有するに至ったことを、彼は、進化論的視点ならびに合理化思考の進展から説明する。

指導者は「中間的な目的」が「偽りの目的」に転じないように、絶えず「中間的な目的」を「真の目的」の視点からチェックすべきである。この意味で、「正しい政策」は、「真の目的」の見地からの価値判断が要請される場所のすぐれて哲学的・倫理学的問題である。こうした視点に立ち、さまざまな社会・経済現象を批判的に分析する体系、これが『正しい政策』でホートリーが目指したものである。

* 本報告のフル・ペーパーについては経済学史学会のサイトを参照。本稿はその抜粋版である。